国 語

第1問 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

消費の文化は、食料や衣料のような生命をイジ^アするのに必要な資源ではなくて、実はなくても生きていくことができる商品が次々と登場しては陳腐化^あしていく過程が生み出した文化である。

ただし、文化というのは人間にとって決して軽視できる現象ではない。むしろ、文化の要因こそ人々を行動にかり立て^イ、また生活の幸福感や充実感の根拠となりうる。ある種の人々は高級車やブランド品の消費を不条理だと考えるし、カネの無駄遣いだと非難するが、これらが人生の目的やアイデンティティ^イになっていく人々も多い。もちろん、その種の高級品も供給が多くなれば陳腐化を免れることは難しい。消費の文化はまさに刻々と変わっていく供給や技術発展による動態と連動している。

誰もが憧れる商品を手に入れ、高い地位に就くことが人々の充実感や幸福感の条件であるとしても、それらを固定することはできない。また特定の価値を X 化することもできない。重要なのは常に動いていることであつて、動きに乗り遅れたり追い付けなくなったりすると陳腐化する。まさにこの動きが驚くほど速いのが消費文化、さらには消費社会と呼ばれる社会の特性なのである。

過去の社会を考えるならば、このような動きはおおよそ考えられなかった。人々が生まれながらの身分で固定されているような社会では、消費も身分相応である。家柄の格式で家屋の外見や乗り物——たとえば、日本の駕籠^{かご}やヨーロッパの馬車——の形まで決められるといった社会では、消費はそれ自体が社会的規範であつて個人の選択ではない。

これに対して現代の消費社会では、消費は人々の選択の問題である。所得の多くを自動車に費やすのも、住宅ローンにつき込むのも、チョコク^ウする^エのも、キンユウ商品^エを買うのも、ギャンブル^エに使うのも、基本的に自由で何らかの外的なキカン^オが^エ決めているわけでも、権力が強制しているわけでもない。

その一方で、自由な消費の結果はそれぞれの人々が引き受けなければならぬ。浪費的消費の結果は、当然自己責任ということになる。ただし、消費に文化の問題が関係してくると人々の対応もまちまちになる。消費の文化が人々に過大な消費を強いる場合、消費する当人はそれがごく自然の、当然の行動であると考えている場合があるからである。いうならば Y としての消費である。周囲の多くの人々が高級車を持っている住宅地に住んでいる人は、自動車に対して関心がなくても、また収入が多くなっても、自分もまた高価な自動車を購入することがある。

この種の消費は、実用性とも経済的な合理性とも別の、文化的な要因による行動であるといえる。そして、人々はしばしばこの種の文化的な要因を、個人の抵抗力を超えた命令として受け止

める。選択の余地はなく、それをするのが当然であり、消費によって生じた経済的な困難は当人の責任ではないと考えるのである。

個人の責任を厳しく問う人ならば当然本人の不合理的な浪費を非難するのだが、当人は浪費とは考えていない場合が多い。そして、当人が好んでいるわけでもないのに、経済的な困難に陥っていく。まさに、ここにこそ消費の文化の問題点がある。

消費文化がもたらす困窮については、しばしばメディアやメディアを使って商品を宣伝する企業や広告会社に非難が集まる。「人々に身の丈に合わない浪費をおおっている」といった非難である。しかし、現実の人々の消費生活がメディアの宣伝によって意のままにアヤツられていくのかといえそうではない。

むしろ、宣伝を打つ人々は、自分たちが売りたいと思っている「商材」の主な顧客層を研究し、人々が求めているものを見極めようとする。これこそがまさに「マーケティング（市場調査・市場研究）」と呼ばれる仕事で、この点で誤りを犯すとどれだけ大きな企業体、宣伝バイタイでも失敗を犯すことになってしまう。いわゆる「売れなかつた商品」「不発の企画（キャンペーン）」である。もちろん、そんな失敗を続けてしまったては会社も売り上げが減ってしまい、極端な場合倒産してしまう。

また、予想外に売れた商品、意図していた顧客層とは別の人々に売ってしまった商品というものもある。マーケティング界で長く語り草になるような商品がまさにこれで、製造する会社も広告する人々も予想外の結果に驚くことになる。

ただし、一旦できあがった消費の文化をあり立て、一層極端な形にするうえで宣伝が大きな役割を果たしていることは、検証は困難かもしれないが、仮説としては考えられる。何らかの商品が売れると、同業者は我も我もという調子でルイジの商品を開発投入していく。そして、さらに多くの消費をさせようとするというわけである。

I、人目を引く広告——そもそも、広告は人目を引くことを身上とするが——を取り上げて多くの責任を押し付けることには限界がある。同様の種類の商品があまりに投入され、同じような広告が登場すると、消費者は飽きてしまうからである。しかも、陳腐化が早まってしまい、価格を下げなければならなくなる。

では、消費の文化にあつて、人々は何を基準にして商品を買っているのか。この場合重要なのは、同じ消費社会に暮らす自分自身がいつたどのような消費行動をしているのかということ。立ち止まって考えてみることである。たとえば、高価な商品を買う場合や、自分が「趣味」と呼んでいる行動がどのような社会的関係で成り立っているのかということを考えてみるのである。

II、決してテレビのいいなり、広告の意のままに動いているわけではない自分自身に突き当たる。むしろ、宣伝などよりも周囲の人々の行動や、人々が「常識」「普通」であると考えられている消費が与える影響の方がはるかに強いことに思い至るだろう。メディア広告は、むしろそ

れらと呼ばれ、助長^{うけつ}することで成り立っているのである。

まさにこれこそが「文化」と呼ぶべきもので、人々は特定の思考様式や生活様式を他の人々と共有し合うことで生活している。もちろん、人間関係はその場で生じては消える「点」の関係ではなくて、長く続く「線」の関係である。たとえば、ある地域に暮らす中年男性の生活を考えるならば、若い頃から乗り換えてきた自動車の記憶が周囲の人々の間で共有されている。しかも、自動車というのは家とともにステイタスシンボル（社会的地位の象徴）という性質を持っているので、今まで高級車に乗ってきた人物がいきなり経済的な自動車に乗り換えるのは難しい。

Ⅲ、家はそれ以上で、各地の農村にそびえ立つ旧家の「お屋敷」はまさに地域の人間関係、社会関係の象徴（シンボル）そのものである。これらの場合、自動車も家も個々の人物の自由な選択ではなくて、文化的に共有される義務であり、また権利でもある。

古くからの伝統が残り、古い時代の価値観が残っている農村に対して、都市の住民が緻密な人間関係から解放されているというのは、長らく社会学の主要テーマの一つであった。農村の人々は狭い人間関係のZに拘束されていて不自由だが、都市の人々は広くて希薄な人間関係で自由に暮らしているというわけである。

しかし、都市住民が無条件に自由なのかといえ、疑問である。都市住民もまた人間関係の中で生きており、やはりそれに応じた文化、消費の文化の中で生きています。都市にも農村とは違った関係があり、都市住民の人間関係が農村の人々のそれに比べてより希薄で、都市住民がより自由に暮らしているのかどうかは簡単には判断できない。狭い地域に密集した人間関係が長期にわたって続くという点では、伝統的な社会の名残を残している農村社会は確かに濃密な人間関係である。人員の移動や入れ替えを伴った都市的な人間関係が農村に比べて本当に希薄であるのかどうかは別問題だろう。

Ⅳ、個々の人々がそれぞれ異なっているはずであり、ある種の人々は緊密な人間関係と消費が直接つながっており、少なくとも本人の考えでは多くのことに優先される。近くに住んでいる幼なじみの友達と高級車に乗ってドライブすることが、ある人にとっては、その他の生活に優先するということはありうる。他の消費についてもそれぞれに様々な意味付けがあり、それぞれ通常よりもはるかに重視する人がいる。まさにこれこそが文化の特性である。文化はそれを共有する人々にとってはしばしば何にもまして重要だが、共有しない人々にとっては理解困難だからである。

（犬飼裕一『歴史にこだわる社会学』による）

問1 二重傍線部ア～クのカタカナを漢字に改めよ。(楷書で記すこと。)

ア イジ

1

イ カリ

2

ウ チヨチク

3

エ キンユウ

4

オ キカン

5

カ アヤツられ

6

キ バイタイ

7

ク ルイジ

8

問2 傍線部a・bの漢字の読みをひらがなで記せ。

a 免れる

9

b 丈

10

問3 波線部あゝうの語の本文中での意味として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちからそれぞれ一つずつ選べ。

あ 陳腐

11

- ① 初心を忘れ、新鮮さがなくなっているようす
- ② 人目に触れることで受け入れられるようす
- ③ 人に嫌われながらも広まっていくようす
- ④ ありふれていて面白みが感じられないようす
- ⑤ 最初の頃とイメージが変わってしまうようす

い 身上

12

- ① 最も中心的な目的
- ② 本来のねうち、とりえ
- ③ そのものの由来、経歴
- ④ 物事の置かれた状況
- ⑤ 定められた使命、宿命

う 助長

13

- ① 欠点をなくし、長所をのばすよう助けること
- ② 傾向などが著しくなるように力を及ぼすこと
- ③ 実際より優れたもののように見せかけること
- ④ 成長・発展の妨げになるものを取り除くこと
- ⑤ 本来の良さが発揮できるように支援すること

問4 空欄 I ～ IV に入る語句として最も適当なものを、次の①～⑤のうちからそれぞれ

一つずつ選べ。ただし、同じものを二度以上選ばないこと。

I 14

II 15

III 16

IV 17

- ① たとえば
- ② すると
- ③ しかし
- ④ むしろ
- ⑤ もちろん

問5 空欄 X ～ Z に入る語として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちからそれぞれ一つずつ選べ。

X 18

- ① 絶対
- ② 相対
- ③ 抽象
- ④ 具体
- ⑤ 可視

Y 19

- ① 演技
- ② ゲーム
- ③ 競争
- ④ 蕩尽とうじん
- ⑤ 儀礼

Z 20

- ① いざこざ
- ② しこり
- ③ しがらみ
- ④ きずな
- ⑤ 軋轢あつれき

問6 傍線部A「消費の文化」の説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

21

- ① 誰もが身の丈に合わない高価で希少な商品を手に入れて消費することを人生の目的とすることによって、商品の需要と供給が増加していく中で、文化的生活を常に意識せねばならないという宿命を背負った、現代に特有の文化。
- ② 誰もが憧れる商品を、社会的規範に従って手に入れることが幸福実現の条件になっている中で、商品の供給量や技術の進歩と連動した変化に遅れまいとして次々と商品を消費していく結果として生み出された文化。
- ③ 現代人は、幸福感や充実感を得るために、特定の高級品やブランド品ばかりを争って求めているが、逆にその行為によって人生の目的を見失ってしまうという不条理な社会構造が生み出した文化。
- ④ 人々がそれぞれの社会関係の中で様々な意味付けられた商品を自由に選択し、手に入れることが幸福感や充実感の根拠となっていて、そうした商品が目まぐるしく入れ替わっていくなかで生み出された現代の文化。
- ⑤ 現代社会においては、経済的合理性によって説明できない消費行動が、人生の目的やアイデンティティの根拠となっているため、誰もが、経済的な困難に陥ることも顧みずに、生きるために不可欠な商品までも際限なく求めてしまう文化。

問7 傍線部B「ここにこそ消費の文化の問題点がある」とあるが、どういうことか。その説明

として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

22

① 現代の消費においては、実用性や経済性と切り離された、文化的な要因によって過大な消費が強いられる場合もあり、その結果、当人はそれが浪費であるとの認識も欠いたまま経済的危機に直面するという問題も生じてくるということ。

② 現代の消費は、周囲の人々に合わせるようにしむけられているという側面を持っているのに、たてまえとしては個人が自由に選択したことになっているので、浪費が過剰に非難されるという問題が生じてしまうということ。

③ 現代社会において、消費は個人の選択に任されているが、その選択は、個人の力を超えた文化的要因と、なるべくいいものを妥当な価格で購入しようとする合理性に支えられているため、当人は浪費とは考えないという問題が生じるということ。

④ 現代の消費行動は個人の力を超えた文化的要因が関与するため、浪費の責任を個人に帰するのは不当であるにもかかわらず、社会が不条理な浪費として個人を非難し、社会的・経済的に追い詰めてしまうという問題が生じるということ。

⑤ 消費は個人の自由な選択ではなく、文化的要因によって決められていくものであるため、多くの人々が周囲に合わせて過大な消費を行うようになると、その結果社会全体として無駄な消費が増えてしまうという問題が生じるということ。

問8 傍線部C「広告会社に非難が集まる」とあるが、筆者は広告の責任についてどう考えているか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 23

① 広告はうまく使わないと商品が陳腐化して、かえって消費者を飽きさせる効果があるので、広告会社が全てをコントロールしているとは言えない。

② 広告によって人々を意のままにあやつれるというのは幻想であり、むしろ、気まぐれな消費者に振り回され、当てが外れたりするのが現実であるので、広告会社に責任はない。

③ 広告は消費の文化をあり、私たちが消費行動において「普通」だと感じる基準を作っているのだから、広告会社には一定の責任があると言わざるを得ない。

④ 広告会社は同じような広告をたくさん作ることで人目を引き、消費をおおっているのだから、消費者の浪費について責任を逃れるわけにはいかない。

⑤ 広告は、消費者の求めているものに合わせて商品を宣伝するものであり、人々をあやつっているわけではないので、広告会社には大きな責任があると言えない。

問9 傍線部D「社会的関係」とあるが、筆者は消費と社会的関係についてどのように考えているか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 24

① 人々は思考や生活の在り方を他者と共有する社会的関係の中で暮らしているため、消費は自由な選択ではなく、文化的な義務や権利に基づくものとなっており、その時その時の関係の在り方によって、社会に属する人々の消費は目まぐるしく変化していく。

② 農村では緻密な人間関係の中での義務に基づいて消費が行われているのに対して、都会では希薄な人間関係の中で自由な消費が行われているとされてきたが、実際は両者に差はなく、同質の人間関係の中で、社会の規範に応じた消費活動が営まれている。

③ 人々は、都市でも農村でも特定の思考や生活の様式を、他者と持続的に共有し合って暮らしているが、こうした人間関係や社会的関係に基づいて、個々の人々によって消費は様々に意味づけられ、その優先度が判断されている。

④ 消費と社会的関係のありようは、都市か農村かということよりも、個々人によって違っているというのが実態だが、共通しているのは緊密な人間関係と消費が直接つながっているということであり、社会的関係がなければ消費行動は成立しない。

⑤ 消費に影響を与える社会的関係の濃淡に都市と農村による明らかな差はなく、同じ地域内に住んでいるというつながりに基づいて、それぞれの地域では誰もが人間関係と消費の緊密な関係の中で生きていかざるを得ないのである。

問10 本文の内容に合致するものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

25

① 人々は様々な考え方や暮らし方を、他の人々と共有して生きており、かつその関係を長く持続することはどの時代においても困難であるため、文化と自由は常に対立する宿命にある。

② 文化は人間にとって幸福の根拠となったり、様々な行動を引き起こす要因となったりすることも重要なものだが、その文化を共有しない者にとっては、理解しがたいものである。

③ 身分が固定されていた過去の社会と、現代とでは、消費の在り方は全く違ったものになっており、消費の結果に対する責任の主体も、昔は家だったのが現代では個人になっている。

④ 文化は人の生命に直接かわるものではないゆえに軽視されがちであるが、人々の行動を引き起こすきっかけであり、人生を充実させる根拠でもあるので、無視することはできない。

⑤ 現代の消費文化の中では、経済的困難で苦しむ人が多いが、その責任を当人や広告会社にだけ問うのは間違っており、結局はその文化を創り出した私たち自身に問いかけるしかない。

第2問

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

今から二十年ほど前の夏のある日。私は、生命論を専門とする哲学者と、生命の理論に関する議論をするため、品川あたりの海沿いにあった、その方の研究室を訪ねました。その日までに、何度か研究会などで話をし、その方が植物的思考——動かずに、受動的でありながら能動的であることを志向する思考——を中心にスエーデン生命論の野心^あを持っていること、私が、物質であろうと、全ての対象が観測者であるという描像^注——わたしが見ているものもわたしを見ているという描像——を持つていることは、互いに前もって確認していました。

その日は、私が、「全てのモノは観測者である」という描像を説明し、これに関して議論する日でした。午前中十時ごろから始まった議論は、ガランとした小さなセミナー室にこもって行われました。暑い夏の日であるにもかかわらず、部屋にはエアコンもなく、風通しも良くない。熱中症になるのをペットボトルの水で防ぎながら、朦朧^{もうろう}とした頭で板書しながら議論をしました。「全てのモノは観測者である」ことの根底には、わたしの認識と、わたしの認識と無関係に存在するはずの世界との、関係の問い直しがあります。

私は、「わたし」が認識するから世界が存在するものの、その「わたし」も世界に対してトツケン性を持たず、「わたし」は何かによってもたらされること、ここから、世界の外部の存在が示唆^いされ、「わたし」は外部によってもたらされること、したがって世界内の存在は、絶えず不安定な存在として生成⇨存在という存在様式しか在り得ないこと、といった自説を展開しました。このような考え方を内部観測と言います。その方は、

「世界の内側から観測するというのは、世界を限定的にしか見ないということですか。郡司さんが今、この部屋にいるとき、見ているのはこの部屋と私だけです。まさに今、太平洋の真ん中でイワシの大群が泳いでいることでしょう。そのイワシは誰にも見られていない。I、そのイワシは存在しないのですか」
と聞いてきました（もちろん問題を明確化するための、あえての問いです）。

イワシは私と無関係に存在するでしょう。私が確認していなくても、行き着くことのできない広大な太平洋が存在し、そこにはイワシの群れが泳いでいるだろうと思います。

では、「イワシは私と無関係に存在する」という確信は、どのようにもたらされるのでしょうか。私の経験的な推論から確信されるのでしょうか。

私たちは、自分で確認しなくても、個人的な経験的事実から類推することができます。子供の頃に見た、小さな水路に泳ぐフナの群れは、別な日に行ってもまた同じような流れの淀みにいて、私が見ていなかったときも、同様にそのあたりにいたのだろうと考えることができました。

また書籍や様々なメディアを通じて、私は広大な太平洋を知り、イワシの群れを知っています。個人的経験であるフナの群れの体験から類推して、イワシの群れが、私が見ていなくても、太平

洋を泳いでいるだろうと考えることができます。そういった様々な経験からの類推によって知識に対する信頼が生まれ、私は、経験と知識の総和によって構成された世界の存在を確信する。こうして私は、太平洋の沖で泳ぐイワシの存在を確信するのでしょうか。あえて言いました。そうではないのだ、と。

どうして、そうではないか。書籍やメディアで得られる知識は、それ自体であり、それ以上でも以下でもない。あなたが図鑑でイワシの群れの写真を見たとしてもしよう。そこに写っていたイワシは千二十七匹のイワシであり、その数のイワシだった。Ⅱそれは写真であり、動いてもいなかった。あなたは、この一つの具体的事例に過ぎず、一個の記号に過ぎない千二十七匹のイワシから構成されるイワシの群れの写真から、生きているイワシの群れを推定しているのでしょうか。

生きているイワシの群れを推定し、類推し、確認する。それはどのような行為なのでしょうか。通常、その推定、類推は、類推自体のモチベーションである「イワシとは何か」に答える以上の推定を用意しない、と考えられます。答え方のゴールが、例えば「生物学的説明」のように決まっているのです。経験的類推や推定とは、そのゴールに向けた思考過程に過ぎないのです。

類推は、「イワシとは何か」なる問いと答えの関係以上でも以下でもない。類推はこうして知識化されるだけです。私が否定した経験と知識のⅩとは、このような類推に基づく知識です。さてここで、知識レベルの指定というのは、「記号・イワシ」という問題に対して、どう答えたいか、答え方(生物・イワシ)の指定を意味します。記号・イワシとは、イワシという和名や学名、それにフズイする写真などの集まりを意味しています。それに対する生物・イワシは、いわゆる生物図鑑にノッているようなイワシの定義であり、イワシの生態に関する記述なのです。文脈の指定は、問題・解答の関係を指定するのです。

ここでいう知識レベルとは、「イワシとは、与えられた定義以上でも以下でもなく、与えられた定義に、厳密に一致する」ことでイワシが理解されたとする、知的水準を意味しています。このレベルでイワシを知るものは、イワシとは何かと問われれば、与えられた定義をフクシヨウするだけです。それ以外のことはイワシに無関係なのです。

生物・イワシ(イワシの生物学的Ⅹ)は記号・イワシにシユクヤクされ、記号・イワシは生物・イワシを指し示す。両者のこの、「指示する・指示される」の関係に關与する外部は一切ありません。イワシの理解は、記号・イワシと生物・イワシによって自己完結しているのです。

両者の関係に關与するかもしれない外部、それが「無限定イワシ」であり、生物・イワシの外部です。それは定義には書かれていない、あり得るかもしれない生きたイワシの理解です。しかしそれは、求めない限り、決してやっつけない。生きたイワシのイメージは、固定された知識レベルでは決して陽に開かれず、知識の外側に留まり続けるのです。

このように知識レベルを指定し、イワシを理解するものが、人工知能です。未知の概念「イワ

「シ」を知覚したら、まず、ボウダイキなデータベースの中から、データ探索の範囲を限定します。それが知識水準の固定、**Z**の固定です。その範囲で、「イワシ」の説明を探索し、見つかったら探索を終了し、答えである説明を提示する、というわけです。(注)自然知能は、みんなの合意する普遍的知識水準において、人工知能と同じことをするだけです。

Ⅲ、人工知能や自然知能では、「イワシとは何か」の問いの中に、経験していない太平洋のイワシ、ガセンザイクすることはないでしょう。「今、太平洋にイワシは泳いでいますか」と問われた場合に初めて、この問いに対する探索範囲を指定し、その範囲で答えを出すのです。それは蓄積された「イワシ」のデータや、「太平洋」のデータ、「多様性」というデータ、それらを繋ぐデータ構造として、様々な魚がいる太平洋が推定され、「太平洋を泳ぐイワシ」が推定されて、「イエス」と答えることになるのです。

(郡司ペギオ幸夫『天然知能』による。ただし、出題の都合で本文を一部改変している。)

(注) 描像——抽象的な概念などを理解しやすい形にした説明。

陽に開かれず——ここでは「積極的には活用されずに」の意。

人工知能・自然知能——ここでは、筆者が提唱する思考様式(ただ世界を受け入れるだけとする「天然知能」)

と対照され、「人工知能」が「用途や評価が明確に規定された上で対処する思考様式」、

「自然知能」が「一般的な自然科学的思考様式」という意味で用いられている。

問1 二重傍線部ア～クのカタカナを漢字に改めよ。(楷書で記すこと。)

ア	ス えた	26
イ	ト ッケン	27
ウ	フ ズイ	28
エ	ノ っている	29
オ	フ クシヨウ	30
カ	シ ュクヤク	31
キ	ボ ウダイ	32
ク	セ ンザイ	33

問2 傍線部 a・b の漢字の読みをひらがなで記せ。

a	広 大	34
b	厳 密	35

問3 波線部あ～うの語の本文中での意味として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちからそれぞれ一つずつ選べ。

あ	野心	①	社会に働きかける画期的な構想
		②	したたかさを感じるほどの意欲
		③	誰も気付かない個人的な発想
		④	心に秘めた挑戦的な強い望み
		⑤	経験がもたらした切実な願い
い	示唆され	①	はっきりと指し示され
		②	隠れようがなくなり
		③	それとなく教え示され
		④	堂々と見せつけられ
		⑤	遠回しにそそのかされ
う	普遍的	①	原則に添った
		②	広く共通する
		③	昔から変わらない
		④	唯一無二の
		⑤	ありふれた

問4 空欄Ⅰ～Ⅲに入る語として最も適当なものを、次の①～⑤のうちからそれぞれ一つずつ選べ。ただし、同じものを二度以上選ばないこと。

- ① だから ② どうして ③ だとすると ④ ところが ⑤ そして
- I 39 II 40 III 41

問5 空欄X～Zに入る語として最も適当なものを、次の①～⑤のうちからそれぞれ一つずつ選べ。ただし、同じものを二度以上選ばないこと。X 42 Y 43 Z 44

- ① 定義 ② 文脈 ③ 議論 ④ 総和 ⑤ 事例

問6 傍線部A「わたしが見ているものもわたしを見ているという描像」とあるが、それは筆者のどのような考え方に基づいているか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 45

① 観測者は観測される対象がたとえ物質であろうとも対等の立場で冷静に見つめることで正しく認識することができるので、観測対象も自分を見ていると想定する謙虚な姿勢が必要であるとする考え方。

② 観測者は自分一人に限らず無限に存在し、観測から導き出される世界も無数にあることを前提として、自分の存在を確認させてくれる目の前の対象と向き合うことから始めるべきであるとする考え方。

③ 観測者が認識することで世界が存在していることは確かであるが、その存在は観測者に委ねられ不安定であるため、観測者は常に観測される側の立場から客観的に振り返ることが求められるとする考え方。

④ 観測者が認識している世界は観測者の認識の外部に存在する独立した大きなものであるが、その外側にある世界に入り込みあらゆるものを内側から観測することで正しい認識ができるとする考え方。

⑤ 観測者が特別な立場にある存在として一方的に観測対象を認識しているのではなく、観測者の存在をもたらししている何か外部の存在があるからこそ、観測者として存在しているとする考え方。

問7 傍線部B「もちろん問題を明確化するための、あえての問いです」とあるが、「その方(哲学者)」が「私」にこのように問いかけた意図は何か。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 46

- ① 人間以外の観測者を仮定するという筆者の認識の方法について、十分には納得できず疑問を感じていることを、具体的な比喻を用いてはつきりと表明しようとした。
- ② 筆者の考え方の根本に関わる論点として、対象を直接的に観測することの可否と対象を認識し理解することの可否との関係性を、端的に明らかにしようとした。
- ③ 筆者の説明では欠けていた、離れた場所にあるものが把握できるかという点について、分かりやすい例を挙げて把握できる可能性があることを確認しようとした。
- ④ 筆者の問題提起を正確に受け止めて議論を深める前提として、内側から限定的に観測するという独特な世界観について本来の意味の説明を求めようとした。
- ⑤ 対象の把握が限定的であるという筆者の理論の課題について、筆者が答えにくい点をあらためて質^{ただ}すことでそれ以降の議論を有利に展開しようとした。

問8 傍線部C「そこにはイワシの群れが泳いでいるだろうと思います」とあるが、この傍線部における「イワシ」と同じ意味で用いられている「イワシ」を、本文中の二重傍線部①～⑤のうちから一つ選べ。 47

- ① 千二十七匹のイワシ
- ② 記号・イワシ
- ③ 生物・イワシ
- ④ 無限定なイワシ
- ⑤ 未知の概念「イワシ」

問9 傍線部D「あえて言いました。そうではないのだ、と」とあるが、筆者はなぜそのように言うのか。その理由の説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

48

- ① 直接的に確認していないものであっても経験や知識を総合的に用いてその存在に確信を持つことは、人工知能や自然知能にとつては日常的に行われていることであるが、筆者が用いている理論においては想定されておらず、受け入れることができないから。
- ② 直接的に確認していないものの存在を確信するためには、人工知能における非常に多くのデータと自然知能における人々の合意に匹敵するような手続きが必要となるが、筆者が提唱する理論を用いれば、直感的にその存在に確信を持つことができるから。
- ③ 直接的に確認していないものを個人的な経験的事実やメディアなどからの知識を総合して類推することは、人工知能や自然知能がしていることと同じであり、そこには筆者が想定する外部が関係しておらず、その存在を確信することには至らないから。
- ④ 直接的に確認していないものの存在を確信することは、本来どのような認識の手段を用いても不可能なことであり、蓄積されたデータを機械的に処理している人工知能や自然知能からもたらされる確信は、あくまで類推か推定に過ぎないものであるから。
- ⑤ 直接的に確認していないものの存在を推定することは、データの検索に基づく類推という人工知能や自然知能が獲得した手法を、個人的な体験や知識の段階まで引き下げることであり、筆者が大切にする観測者の視点とは合致しない行為であるから。

問10

傍線部E「イワシの理解は、記号・イワシと生物・イワシによって自己完結しているのです」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

49

- ① 問題としての記号・イワシが答え方としての生物・イワシを指定し、その思考過程においては他の要素が関わることは全くないということ。
- ② 記号・イワシが問題提起されると対応する生物・イワシの定義が自動的に設定され、その定義以外の答え方が成立する余地はないということ。
- ③ イワシとは何かという問いへの答えは、あくまで記号・イワシと生物・イワシとの共通点の範囲の中だけに求めることができるということ。
- ④ イワシを理解することは、知識としての記号・イワシと生態を示す生物・イワシとの互換性を理解することに他ならないということ。
- ⑤ イワシの理解のあり方は、記号・イワシと生物・イワシに関する個人の知識レベルと一致した完全に独自のものであるということ。

問11 本文の内容に合致するものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

50

- ① 書籍やメディアから得られる知識は高い価値を持っているが、あくまで一つの具体的な事例に過ぎないので、それを一般化することは慎重な姿勢が必要となる。
- ② ものの存在を認識する場合、推定・類推・確認という三段階の思考過程があるが、経験や知識を活用して丁寧に段階を踏むことが正しい認識を導く条件である。
- ③ 類推や推定という行為は、本人が自覚しているかどうかにかかわらず、問いを発する前から本人の中に用意されていた答えを自ら確認するという行為である。
- ④ 対象に関する知識を得るということは対象の定義を理解することであり、それを積み重ねることで対象が確かに存在していると認識できるようになる。
- ⑤ 人工知能や自然知能は未知のことに対しても、これまでに蓄積してきたデータを、指定した範囲から拾い出して組み合わせることにより答えを導き出している。

(国語の問題は終わり)